

## 境界を越えていく“イマドキ”の若者たち

伊藤 哲司

茨城大学 人文学部

### [アブストラクト]

現在の若者たちは「ゆとり世代」と呼ばれ、自分たち自身でも「オレらって学力低下なんですよ？」と思っているところがある。自己紹介で「私は人見知りです……でも仲良くしてください」などと話す若者たちは、「何をしたらいいかわからない。でも何かをしたい」という気持ちを抱いていることも多く、たしかにコミュニケーションが少し苦手であるように見えることも少なくない。

しかし「“イマドキ”の若者たちは……」と大人たちが呟きたくなることには、自分たちの世代のほうが優れている（優れていた）と思い込みたい心理が働いている。この言い方は、古代から連綿と続けられてきたと言われるし、もし常に上の世代のほうが優れているのであれば、世界はとっくにダメになっているはずである。

筆者は、10年以上にわたって、学生たちのためのベトナムの旅を企画・実施し、参加学生たちが一皮むけていく現場に寄りそってきた。また東日本大震災後は、「大洗応援隊！」という社会的ネットワークを立ち上げ、学生たちを多く含む活動を促してきた。そんななかで“イマドキ”の若者たちが、自身を縛っている境界を越えていく姿を見つめ、大人たちの若者に向ける眼差しを変化させることを提言したい。

### [キーワード]

“イマドキ”の若者たち、ゆとり世代、境界、ベトナム、大震災

### 1. はじめに

1964 年生まれの筆者は、社会心理学を専門とする大学教員になって 21 年目になる。その間ずっと、若い学生たちと付きあい、彼ら彼女らがさまざまなことを通して変わっていく姿に寄りそい見つめてきた。大学関係者からも「最近の学生たちの学力低下」を嘆く声をよく耳にするが、筆者の実感としては、現在の若者たちが一昔前に比べて「学力」が落ちて劣っているというようには感じられない。もちろん、何らかのテスト得点を指標にすれば、そのような「学力低下」が示されてしまうのかもしれないが、ひとつふたつの指標で「学力」を測ることなど、もとより無理なことである。今回のこの発表では、そんな“イマドキ”の若者たちから、筆者自身がむしろ学んだこととお話したい。

### 2. “イマドキ”の若者たち

現在の若者たちは「ゆとり世代」と呼ばれ、実は自分たち自身でも「オレらって学力低下なんですよ？」と思っているところがある。もともと「ゆとり教育」には、「学び」を学校から解放する目的もあったと言われる。つまり、学びの場を学校に限定せず、休日などに地域や家庭でも学ぶことにより、社会的に学力を育むことが期待されていたのである（伊藤・山崎，2009）。しかしそれは成功せず、再び「脱ゆとり教育」に転換してしまった。翻弄されたのは、現場の教師たち、そして何より若者たち自身である。そんな大人たちの失政に由来するコンプレックスをどこかで担わされている若者たちは、自己紹介で「私は人見知りです……でも仲良くしてください」などと話す。「何をしたらいいかわからない。でも何かをしたい」という気持ちを抱いていることも多く、たしかにコミュニケーションがちょっと苦手であるように見えることも少なくない。

しかし「“イマドキ”の若者たちは……」と大人たちが呟きたくなることには、自分たちの世代のほうが優れて

いる(優れていた)と思い込みたい心理が働いている。この言い方は、古代から連綿と続けられてきたと言われるし、もし常に上の世代のほうが優れているのであれば、世界はとっくにダメになっているはずである。現実にはそんなことはないわけで、大人たちの若者たちに対する眼差しの向け方が問われている。

### 3. ベトナム学生交流の旅と「大洗応援隊！」

筆者は、1998 年にベトナムで在外研究を行って以来、ベトナムに関わり続けるなかで、学生たちが参加するベトナムの旅を 10 年以上に渡って企画・実施してきた。これまで筆者と一緒にベトナムに渡った学生たちは、延べ 200 人ぐらいに上る。そして、旅に参加した学生たちの誰からも、「ベトナムに行かないほうがよかった…」という声は聞こえてこない。ほとんどの学生が、何かをそこで感じ取り、一皮むけた姿を帰国後に見せてくれるのである。なかには、その後1年ぐらいのベトナム留学を果たし、ベトナム人と結婚するに至った卒業生も 2 人ほどいて、ベトナムの経験は一時的なものに留まっていないことが多い。

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災も、結果的に学生たちに大きな刺激を与える出来事となった。震災 1 ヶ月半後ぐらいに、学生たちと筆者が学外の社会人とも協力して立ち上げた「大洗応援隊！」という社会的ネットワークは、4.2 メートルの津波が襲った茨城県東茨城郡大洗町の復興支援に関わり、現在も商店街の空き店舗を借りて毎週末にカフェを開いている。そこでの長期にわたる人的交流が、地元の人々、また外部から来る人々を結びつける働きをしている。また、学生たちが大学に働きかけて立ち上げた災害ボランティアバスツアーは、地元の観光会社(石塚観光)の全面的な協力を得て、ほぼ毎月、宮城県東松島市へ行って活動を行っている。自らお金を出し被災地でのボランティア活動に参加する学生たち、彼ら彼女らもまた、そこで確実に何かを得ていっているようである。

### 4. 境界を越えていくということ／大人たちの眼差し

境界は、私たち自身を外部から守るためのものでもある。その内側にいれば、とりあえずの安全が確保できるからである。外の世界には何があるのか、どんな人がいるのかもわからず、そこを越えていくということは、ときにとても不安をかきたてられ、あるいは危険にさらされることにすらなる。

しかし、自分自身が何重にも築いてきてしまった境界を思い切って越えてみなければ、新しい出会いもなければ、新しいことも始まっていけない。人はそのような境界を幾度も越えようとしてきたし、“イマドキ”の若者たちも、それが必要であることは気づいている。「自分も何かしたい」のである。しかし「何をしたらいいのかわからない」というときに、少し背中を押してやる必要があることもある。

若者たちを、コミュニケーションもまともに取れないダメな人たちと見るか、可能性に満ちた人たちと見るかによって、若者たちの姿がまったく違って立ち上がってくることだろう。大人たちがどのような眼差しを向けるかによって、若者たちも変わるのである。むしろ問われているのは大人の側の見方の変化なのではなかろうか。かつては私たち大人も、上の世代から「“イマドキ”の若者たちは……」と呼ばれたに違いないのであるから。

### 5. おわりに

教師が、優れた生徒たちだと思って教育にあたれば、生徒たちの成績が本当に伸びることをピグマリオン効果と呼ぶ。そうなれば、教師自身のモチベーションの向上にもつながって、良き循環ができることだろう。教師でなくても 1 人の大人として、若者たちをどういう人たちと見るかということによって、この社会の活気自体も変わってくるに違いない。そんななかで“イマドキ”の若者たちが、自身を縛っている境界を越えていく姿を見つめ、大人たちの若者に向ける眼差しを変化させることを提言したい。

### 【参考文献】

伊藤哲司・山崎一希 2009 『往復書簡・学校を語りなおす:「学び、遊び、逸れていく」ために』 新曜社